

新任の先生方

今号では、2006年度と2007年度の新任教員の先生方を合わせてご紹介したい。退職される先生が毎年おられ、2年連続で新しい嘱託講師の先生方をお迎えした。そして、2007年度春に専任教員の宇治郷毅先生が着任した。すべての新任教員の先生方から自己紹介の文章をいただいたので、以下、50音順でご紹介する。

〈新任教員紹介（50音順）〉

1. お名前；2. ご担当科目（初年度の）；3. 最終学歴および略歴；4. 学生に一言

2006年度新任教員の先生方

1. 井上真琴

2. 学術情報利用教育論

3. 同志社大学文学部卒業。卒業後、同志社大学職員として教務事務、システム開発等に従事し、現在は今出川図書館の情報サービス課に勤務、レファレンスサービスを担当しています。和洋ともに古書が好きで、毎年1冊で車を買えるほどの稀覯書を私的に購入しています。また、システム構築を経験していますので、海外の電子図書館システムの調査に出かけたりしており、紙・電子ともに得意としています。

4. 学生さんの情報活用能力向上を祈念し、2004年に『図書館に訊け！』（ちくま新書）を刊行したのが機縁で、科目を担当しています。資料や情報を「調べ、使いこなす身体技法」を皆さんが得られるように授業を展開していきます。一生使える情報リテラシーを身につける出発点としましょう。

1. 中川あゆみ

2. 読書と豊かな人間性／児童サービス論

3. 大阪外国語大学外国語学部デンマーク語科卒業・関西外国語大学大学院

外国語学研究科言語文化専攻博士課程後期単位取得退学。学部在学中にデンマーク、The Royal School of Librarianship 等にデンマーク政府奨学金による留学。大阪府立大学、滋賀大学、帝塚山大学、立命館大学その他の大学で本学の担当と同様の科目を担当。大阪国際児童文学館主催「ニッサン童話と絵本のグランプリ」予備審査員。北欧児童文学の研究と紹介、絵本研究を手がけている。

4. 私が授業で強調しているのは、子どもの本を知り判断する力を養うことと、子どもを知り、自己の児童観を確立することである。授業の課題として、多数の児童書を読んで記録を取ることを求めている。この課題に音を上げてしまう学生が意外に多いのは残念だが、一冊一冊の本について書かれたコメントを読んでいると、最初、絵本や児童文学を読む視点が「教育的視点」（〇〇を子どもに教える効果がある等、しつけや教訓を読み取ろうとする）であった学生が、冊数を重ねるにつれ、作品そのものの魅力に取りつかれて一読者として読むようになり、一つの作品として評価をする視点へと変わっていく軌跡が多く見られる。私の担当する科目はどちらも、子ども／児童生徒と本を結びつける「人」の養成を目的としている。目の前の「この子ども」と共感できる本を選び、手渡していけるそんな司書や司書教諭が、そしてそんな司書や司書教諭がいきいきと活躍できる図書館を作っていける人材が一人でも多く育って欲しいと心から願っている。

1. 脇谷邦子

2. 図書館演習Ⅱ、児童サービス論、読書と豊かな人間性
3. 大阪女子大学国文科卒。大阪府立図書館勤務を経て現在に至る。在職中は主に児童奉仕、障害者サービス、企画協力業務等に携わる。現在は、大学非常勤講師の傍ら、地域の子ども読書推進活動を支え、図書館問題研究会大阪支部の事務局を担当し、「堺市の図書館を考える会」を始め、大阪府内各市の住民と連携して、図書館の発展を目指して活動を続けている。
4. 学生等、一部の人の勉強部屋から市民の図書館へと、図書館が大きく変わっていく時期に図書館で働き、図書館の発展に関わることができて幸せであった。仕事を通して多くの人と出会い、交流することで自分自身も成

長することができた。図書館で仕事や人生の問題解決に取り組む人、図書館で趣味や暮らしを豊かにして、人生を豊かにしている人、図書館で生きがいを見つける人、成長していく子どもたち、とりわけ、子どもたちの読書環境を良くしようと図書館づくりの住民運動に乗り出した普通の主婦たちが、図書館だけではなく地域や社会へと視野を広げ、自分を大きく成長させていく姿に感銘を受けた。その人たちに支えられて大阪の図書館は大きく発展したし、図書館もその人たちの成長を支えた。「人」の成長を大きく支えることができるのが図書館である。授業を通して、そういう図書館の役割と魅力を、一人でも多くの方に伝えることができたらと思っている。

2007年度新任教員の先生方

1. 宇治郷 毅 (教授)
2. 図書館情報学概論、図書館史、学術情報利用教育論特論
3. 1966年同志社大学法学部を卒業し、68年同大学院法学研究科政治学専攻修士課程を修了。68年より2003年まで国立国会図書館に在職。従事した業務は、国立図書館としての業務である収集、閲覧、参考調査を、議会図書館としての固有業務である文教関係調査業務であった。また90年代後半からは館全体の管理運営にたずさわり、副館長にて退職した。特に関西館、国際子ども図書館の設立に従事した。退職後は、明治大学リバティ・アカデミーの講師として図書館特論を担当し、また厚生労働省所管の「しょうけい館（戦傷病者史料館）」運営専門委員長として勤務した。個人的には長い図書館生活を通じて、図書館の歴史、社会的存在意義に関心をもち研究し、同時に東アジアの教育文化史にも関心をもち研究してきた。
4. 図書館情報学は、近年もっとも変化をとげつつある学問分野の一つである。学生の皆さんは、いま司書課程の多くの科目をとられて新しい知識と技術の習得に戸惑われていると同時に新鮮な感動も味わっておられると思う。単位をとることも大事ですが、図書館情報学を学ぶほんとうの面白さに目覚めてほしいと思う。そして資格を得たらできるだけそれを生かせる仕事に従事してほしいとは思いますが、もしそうでなくてもこの学問で学んだことの一つ二つでも生涯のテーマ（関心事）として持続してほしいと思う。

この学問を学ぶことでぜひ図書館が素晴らしい存在であることを知ってほしい。

人がもつ関心は社会人になってからの置かれた環境、体験、年齢などによって変わっていくものだが、大学時代に見つけ出した関心事は意外に長く生涯にわたって持続されるものだ。私の場合は図書館史と韓国文学との出会いがそれで、現在でも大きな比重をしめている。それと学生時代にはおおいに内外の古典を読んでほしい。社会人になると仕事関係の本は読んでも、なかなか古典を読む時間がない。古典は豊かな人間形成に役立つだろう。その時ぜひ簡単なものでもよいから読書ノートをとる習慣を身につけられたらよいと思う。私はいま行われている大学生協の「読書マラソン」は大変良い試みだと思っている。語学も大事で、英語でも中国語でも何でもよいがぜひ一生続けていく語学の基礎を学生時代に作ってほしい。職場の中で伸びていく人は、何か一つでもテーマをもってコツコツ努力している人である。そしていつかきっと「あの人に聞いてみよう」「あの人にたのもう」というチャンスがきて、その人は職場でなくてはならない存在となるものだ。「継続は力なり」とはよく言われるが、それを実行する人は少ない。ぜひ何かにチャレンジし、生涯にわたって続けられるものを見出して頑張してほしい。

1. 呑^{どん}海^{かい}沙^さ織^{おり}

2. 図書館経営論、情報管理
3. 大阪市立大学大学院創造都市研究科創造都市専攻博士（後期）課程修了。京都大学工学部電気系図書室、同附属図書館、同人間・環境学研究科総合人間学部図書館参考調査掛長、奈良女子大学附属図書館情報サービス係長を経て、現在、京都大学医学図書館専門職員及び同志社大学嘱託講師、立命館大学非常勤講師。
4. 図書館は、時間や空間を超えて人と人とのコミュニケーションを創出する場だと思います。例えば、百年前に英国で書かれた図書を読むことで、百年前に生きていたその著者と思考を交わすことができます。デジタル化・ネットワーク化が進み、メディアが多様化する中で、変容しつつある図書

館ですが、時空を超えて人と人とを結びつけるという本質は変わりません。この魅力的な図書館というものについて、図書館経営等を通じて皆さんと一緒に考えたいと思います。

1. 中島幸子

2. 図書館演習 I

3. 同志社大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程修了。京都大学教養部図書館、ノートルダム女子大学図書館勤務を経て、現在帝塚山大学人文科学部専任講師。

4. 「変わる図書館」というニュースを最近よく見聞きします。東京のど真ん中で「夜10時までオープン」、「起業支援します」、「病気のこと知りたい方、お手伝いします」、これはれっきとした公共図書館の話です。「日本一の図書館めざして」「他ではやってないサービスを」、図書館員の口から出た言葉です。「未来の図書館」はいまや現実に近づいています。インターネットで検索万能（そう見えているだけ）の時代に、図書館不要論を吹き飛ばすかのように「眠れる図書館」の巻き返しが始まっているといえるかもしれません。「情報と人を結ぶ」図書館員の役割を今ほど痛感するときはなかったと思います。みなさんは伝統ある同志社大学の司書課程で「理想の図書館人」を追求してください。図書館というスペースは「知の宇宙」であり、そこに「探検する」スペシャリストがいてこそ、「発見」が可能となり、それが人々の生活を、社会を変えていくことになるかと信じています。